

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	法学部
大項目	6 教育内容・方法・成果
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 学生の学修ニーズに合わせて教育効果を高めるような専門科目の履修を促進する。	→履修説明の実施回数と、履修モデルの提示	B	B	A	A	A
2. 演習科目のメニュー・数を増やして各年次に系統的に配置する。	→演習の種類・開講数と履修登録率・単位取得率	B	B	A	A	A
3. 各専門科目の履修年次を見直し、効果的に配置する。	→履修年次を変更した科目の履修登録率・単位取得率	B	B	B	B	A
4. 早期卒業をつうじたジョイント・ディグリー取得や大学院進学を奨励する。	→複数分野専攻制(MDS)履修者数(他学部生の履修者数、法学部生の履修者数)、早期卒業によるジョイント・ディグリーの取得者数(他学部生の法学士取得数と法学部生の他学部の学士の取得者数)、大学院進学者数(法学研究科・司法研究科への進学者数)	B	B	B	B	B
5. 各年次の履修科目登録数の上限を設定し、系統的・効果的な履修を可能にする。	→学生の各年次の単位修得状況	B	B	A	A	A
6. 少人数教育の専門科目を系統的に配置する。	→少人数教育の科目の開講数、履修登録率・単位取得率	B	B	B	B	A
7. 到達目標・シラバスの内容を明確化・詳細化し、授業内容との整合性を図る。	→授業内容の満足度調査、およびシラバスとの整合性に関する調査	B	B	A	A	A
8. 適正かつ厳正な成績評価を確保する。	→成績評価・成績分布調査結果の各教員への周知	B	B	B	B	B
9. 学習会・研究会などの企画をつうじて各教員に授業方法を検討する機会を増やす。	→FD(ファカルティディベロップメント)やカリキュラム検討のための学習会・研究会の実施回数・参加人数	A	A	A	A	A
10. 個別学修相談の機会を増やす。	→個別学修相談の件数	B	B	B	B	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 新カリキュラムにおいて設定した6コースそれぞれの履修モデルを作成し、法学部ホームページに明示した。コース説明会は、司法特修コースについては、コースが2年生春学期から開始となり、また選抜制を取り事前に準備が必要なため、1年生の春学期(2012年度春学期)に2回実施している。その他のコースは2年生秋学期から開始するため、それに従って順次開催している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 現時点で大きな課題や改善すべき点は明確になっていないが、拡大カリキュラム委員会で情報を交換している。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か コース制に対する学生、教員の評価を確認し生まれた課題に適宜対処していく。</p> <p>その他</p>	☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 新カリキュラムのもとで演習科目の種類を増やした。具体的には1年生開講の法学基礎演習と政治学基礎演習を廃止し、スタートアップ演習、基本演習、2年生開講のコース導入演習、法政教養演習2単位、模擬裁判演習4単位、3,4年生開講の、法学研究演習、政治学研究演習、法政文化教養演習各I、II(2014年度より開講)、さらに各コースに設定された実践演習AB(司法特修実践演習はCDも)を設置した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か これら演習科目の履修者総数は2015名、うち単位取得者は1910名。効果や課題の検証は今後行う。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 演習履修者および担当教員に対して演習の効果、満足度について調査する。</p> <p>その他</p>	☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 日本法史A、政治過程論、外交史A、憲法訴訟論、債権各論、不法行為法、日本法史B、英米法A、公共政策論B、外交史Bが履修基準年度を2年生からに変更した(それ以前は3年生から)。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か これらの科目の平均単位取得率は50.5%であった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 履修基準年度変更の効果について科目担当者への見解を尋ねる。</p> <p>その他</p>	☆

目標4	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 学部として学生に対して定期的な広報を行った。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 各年度ごとの実績は以下の通りで、安定的に実績が出ている。改善すべき点は特になし。 2009年度: 早期卒業4名、内大学院進学2名、JD2名 2010年度: 早期卒業6名、内大学院進学3名、JD3名 2011年度: 早期卒業2名、内大学院進学2名 2012年度: 早期卒業3名、内大学院進学2名、JD1名 2013年度: 早期卒業4名、内大学院進学1名、JD3名	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後も継続的に広報を行い、学生への周知徹底を行う。	☆
		その他	☆
			☆
目標5	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 拡大カリキュラム委員会の下で単位取得の上限について検討し、カリキュラムでは全学年において年間履修登録単位数は48単位以内とした。ただし司法特修コースの学生およびMDSプログラムを履修する学生は、早期卒業をサポートすべく、年間56単位までの履修を認める。また2年次終了時点でGPA上位5パーセント以内の成績優秀な学生は3年生以降各学期28単位までの履修を認め、編入学生についても4年生での卒業が可能となるようサポートするため、各学期28単位までの履修を認めている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 現時点では不明。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新カリキュラムの下での留年率などを確認し対応を学部で協議する。	☆
		その他	☆
			☆
目標6	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 新カリキュラムにおいては、少人数・双方向式の授業として演習科目の種類を増やして配置した。専門科目となる演習科目としては、1年生開講の基本演習2単位、2年生開講のコース導入演習2単位、模擬裁判演習4単位、3,4年生開講の、法学研究演習I、II、政治学研究演習I、II(各4単位)、各コースに設定された実践演習AB(司法特修実践演習はCDも)それぞれ2単位、がある。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 成果、効果、課題などについての情報を現在取集中である。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 情報を収集後、拡大カリキュラム委員会において議論し、適切な対応を考えて教授会に提案する。	☆
		その他	☆
			☆

目標7	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか マークシート方式の授業調査質問項目の中に含まれている、シラバスと授業内容との整合性に対する学生の回答について各教員が確認し、対応している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か シラバスが講義内容との整合性は改善されている。一方で、教育は相手のあるものであり、シラバス通りに進捗しない場合がある。いずれにせよ受講生との綿密なコミュニケーションが必要である。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 拡大カリキュラム委員会において課題を確認し、対処を協議し教授会に提案する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標8	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教務担当副学部長より各科目の単位取得率などについての情報を教授会に示し、各教科の成績結果や成績分布が極端に偏ることについて注意喚起を行っている。また成績結果については、その分布状況が教科ごとにまとめられ教員の閲覧に供されている。フランス語教育担当者間では相談機会が持たれている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学部全体として学生評価のあり方を考える機運が生まれてきている。現在、専任教員の評価が厳しめなので、要検討である。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 拡大カリキュラム委員会と教授会で事実認識を共有し、個別評価の検討を各教員に依頼する。また英語担当教員、ドイツ語担当教員間でも成績評価について会合を持つ予定である。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標9	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか FD検討委員会が主催する形で、FD研究会を行っている。2012年度は12月に開催され、新カリキュラムの「スタートアップ演習」のやり方について種々意見を交換した。2013年度は「スタートアップ演習」のレビューと、LUNAの講習などを行った。また2011年度に策定した学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、カリキュラム・マップについてFD活動検討委員会で定期的に検証している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か スタートアップ演習については2013年度のレビューを踏まえて、教育内容の見直しと2014年度からのLA全面導入を決めた。この成果と課題については現在情報収集中である。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か スタートアップ演習についてはFD研究会でレビュー機会を持つとともに、TA、LAの利用について成果と課題を検討する。それ以外のFD活動についてもFD委員会で企画していく。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標10	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院後期課程の学生をTAとして採用し、学生の学修相談を予約制で行っている。教員よりは身近な存在である先輩への相談とあって、学生から常に一定数の利用がある(添付 教学補佐採用数・TA採用者数・学修相談件数参照)。また2014年度からは新入生を対象にLAによる個別の履修相談機会を設けた(3日間で計73名が参加)。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か LAによる新入生に対する履修相談は、新入生のみならず法学部全体に学習の雰囲気をも強める効果があった。新入生からの評価については今後調査の必要があるが、現時点で大きな問題は起きていない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 新入生、LA、TAに対してヒアリングなどの調査を行い、状況を把握し、それを拡大カリキュラム委員会、教授会などで周知する。課題が発見された場合、拡大カリキュラム委員会での議論を経て教授会に提案していく。また2014年度からは新入生を対象にLAによる個別の履修相談機会を設ける。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆